



语言学论丛

中央民族大学“985”工程培育学科建设项目

现代日语 时间复句 研究

現代日本語における時間
の従属複文に関する研究

刘艳文 著



北京大學出版社
BEIJING UNIVERSITY PRESS

语言学论丛

中央民族大学“985”工程培育学科建设项目

现代日语时间复句研究

刘艳文 著



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

现代日语时间复句研究/刘艳文著. —北京: 北京大学出版社,
2012. 10

(语言学论丛)

ISBN 978-7-301-21284-4

I. ①现… II. ①刘… III. ①日语—复句—研究 IV. ①H364.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 225496 号

书 名: 现代日语时间复句研究

著作责任者: 刘艳文 著

责任编辑: 兰 婷

标准书号: ISBN 978-7-301-21284-4/H · 3141

出版发行: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区成府路 205 号 100871

网 址: <http://www.pup.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62759634
出版部 62754962

电子信箱: lanting371@163.com

印 刷 者: 三河市欣欣印刷有限公司

经 销 者: 新华书店

890 毫米×1240 毫米 A5 10 印张 210 千字

2012 年 10 月第 1 版 2012 年 10 月第 1 次印刷

定 价: 32.00 元

未经许可,不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有,侵权必究

举报电话: (010)62752024 电子信箱: fd@pup.pku.edu.cn

序

句法研究是语法研究的一个重要组成部分，复句研究又是句法研究的主要内容之一，而偏正复句（主从复句）研究则是复句研究的重点。在日语的偏正复句中，有一类所谓的时间复句，即由时间从句构成的复句，其特点是前面从句所指称的事件（事態、事象、出来事、event）从时间上对后面主句所指称的事件进行限定。

日本大阪大学工藤真由美教授的『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』（ひつじ書房，1995）指出，从句指称的事件和主句指称的事件之间的时间关系（時間的順序、タクシス、taxis）有三种：① 同时关系（共起の時間関係）；② 先行—后续关系；③ 后续—先行关系（后两种为「繼起の時間関係」）；而从句对主句的事件在时间上的限定方式后也可以分为两种：① 时点的限定（時期限定）；② 时段的限定（期間限定）。工藤教授将时间从句的体系归纳如下：

時間的順序 \ 時間巾		時期	期間
共起（同時）		トキ（ニ）	アイダ（ニ）
繼起	後続（—先行）	マエ（ニ）	マデ（ニ）
	先行（—後続）	アト（デ）	カラ

（上引书p.222）

以往有不少的学者从不同的角度对时间从句进行过研究，但系统的研究并不多见。北京民族大学日语系教师刘艳文的专著《现代日语时间复句研究》对于时点限定型的时间复句进行了较为系统而又深入细致的研究，对前人的学说进行了重要的补充并有所发现，取得了可喜的成果。

《现代日语时间复句研究》一书是刘艳文在其博士学位论文的基础上修改而成的，该书以现代日语中的时点限定型的时间复句（「とき節」「まえ節」「あと節」）为考察对象，从语言事实出发，侧重描写，定性分析和定量分析相结合，清晰地勾勒出了时点限定型的时间复句的体系。

该书首先关注「とき」「まえ」「あと」前接的动词的形式（词形），通过对实例的穷尽性的调查搞清了它们前接的动词都可以采用哪些形态，这也是日语教学的一个难点。该书以从句和主句的动词的时（テンス、tense）、体（アスペクト、aspect）形态的对应关系为主线，重点分析了「とき節」「まえ節」「あと節」是如何在时间上对主句进行限定的（即时间关系上都有哪些类型），作者注意到了从句和主句的动词的语义类型，还严格区分了「とき節」「まえ節」「あと節」在使用时是否采用「に格」的形式。作者还论及了时间与空间的关系，论述时借鉴了认知语言学的分析方法。该书论述充分，言之有据，结论可靠，其成果不仅可以丰富日语复句的研究，而且对于日语教学也有重要的参考价值。

《现代日语时间复句研究》一书的出版标志着刘艳文在日语语法研究中迈出了可贵的一步，我衷心地期待着她在今后的学术研究中不断探索，勇于创新，作出更大的成就。

彭广陆

2012年国庆节前夕于京西寓所

目 次

第一章 序論	1
1.1 本書の目的	1
1.2 本書と関連する概念	5
1.3 研究方法と資料	7
1.4 本書の構成と概要	8
第二章 「とき節」構文について	9
2.1 先行研究とその問題点	9
2.2 トキ節構文の表す時間的な意味	17
2.3 トキニ節構文の表す時間的な意味	96
2.4 「とき節」構文の表す時間的な意味のまとめ	148
2.5 時間と条件の連続性から見る「とき節」構文の意味	153
第三章 「まえ節」構文について	164
3.1 先行研究とその問題点	164
3.2 マエ節構文の表す時間的な意味	171
3.3 マエニ節構文の表す時間的な意味	175
3.4 「まえ節」構文の表す時間的な意味のまとめ	205
3.5 時間と空間の連続性から見る「まえ節」構文の意味	207
第四章 「あと節」構文について	223
4.1 先行研究とその問題点	223
4.2 アト節構文の表す時間的な意味	232
4.3 アトデ節構文の表す時間的な意味	261
4.4 アトニ節構文の表す時間的な意味	279
4.5 「あと節」構文の表す時間的な意味のまとめ	288
4.6 「あと」の認知意味分析	290

第五章 終章	300
5.1 「とき節」「まえ節」「あと節」構文のつながりについて ...	300
5.2 本書の意義	304
5.3 今後の課題	304
参考文献	306
謝辞	312

第一章 序 論

1.1 本書の目的

人間は、目の前にないこと、過去のこと、未来のことなどを、思い浮かべたり描写したりすることができる。その表現手段の一つに時間節で構成される時間の従属複文がある。時間節とは主節の事態が生起する時的制限を表すもので、一つの述語とそれに従属していく幾つかの成分とから成り立っている。時間の従属複文の基本的体系を図式化すると以下のようになる¹。

表1-1 時間の従属複文の基本的な体系

時間的順序 \ 時間巾		時 期	期 間
共起(同時)		トキ(ニ)	アイダ(ニ)
継 起	後続—先行	マエ(ニ)	マデ(ニ)
	先行—後続	アト(デ)	カラ

まず、二つの出来事の＜時間的順序関係(タクシス)＞の観点から、大きくは、＜共起(＝同時)的時間関係＞を表すグループと、＜継起(＝継時的)的時間関係＞を表すグループに分かれる。そして、継起性を表すグループは、＜後続—先行＞関係になるものと、＜先行—後続＞関係になるものとに下位分類される。さらに＜時間巾(時間的枠付け方)＞の観点から、＜時期限定＞的なものと＜期間限定＞的なものに分かれる。「トキ、マエ、アト」系列が、単純に主文の出来事の成立時期の限定・指定を行なうのに対し、「アイダ、マデ、カラ」の系列は、主文の出来事の成立期間の限定・指定を行なうのである。マデは終了時点の限定を、カラは開始時点の限定を行い、アイダは開始と終了時点両方の限定を行う。

今までの時間節に関する研究を見てみると、次のような問題が存在す

1 工藤(1995)参照。

ることが分かる。

第一に、時間節の意味区別に対して主観的な判断による検討が多いので、その判断基準は非母語話者にとって把握しにくいという点があげられる。

時間節は「述語成分+形式名詞」で構成されるものが多い。「とき」、「まえ」、「あと」などがその代表的な例である。形式名詞である以上、格助詞が接続でき、「とき節」の場合は、形式上トキ、トキニという二つのバリエーションがある。「まえ節」の場合は、形式上マエ、マエニという二つのバリエーションがある。「あと節」の場合は、形式上アト、アトニ、アトデという三つのバリエーションがある。また、これらの形式に係助詞ハをつけたトキハ、トキニハ、マエハ、マエニハ、アトハ、アトデハ、アトニハという形をとる場合もある。形式の違いにより、意味も多少異なってくる。その違いも日本語学及び日本語教育の注目している研究課題であり、時間節に関する研究の多くも形式のバリエーションの使い分けに集中している。例えば、久野(1973)、寺村(1983)、益岡(1995)、岩崎(1999)などの研究が挙げられる。その中で、一番有名なのは、益岡(1995)の研究である。その研究結果は以下の通りである：

格助詞を持つ場合：時を特定する格成分として機能する。事態を叙述する部分の内部要素であり、焦点化されうる。

格助詞を持たない場合：時を設定する状況成分として機能する。事態を叙述する部分の外部要素であり、焦点化されない。

益岡(1995)の指摘は有名で、広く受け入れられているが、焦点化できるかどうかの判断は主観に任されており、非母語話者にとっては実感しにくいものである。また、益岡の2タイプに分類する説明は、トキ、トキニまたはマエ、マエニのような2種類しかないバリエーションの分析に適合するが、アト、アトデ、アトニのような3種もあるバリエーションの使い分けにとって論述が不足している。

第二に、時間の従属複文における時間節及び複文主節の述部の構成について体系的に論じたものがないという問題がある。

工藤(1995)では、時間節の構成及び時間の従属複文と述語動詞のアスペクト・テンス体系との相関性について幾つか指摘を出した。しかし、工藤(1995)の指摘は大まかな部分では説得力のあるものだが、幾つか言語事実に合わないところもある。

指摘1：マエ(ニ)、マデ(ニ)、アト(デ)、カラのようなく継起的時間関係>を表す場合の従属文の述語は、運動動詞の<完成相>でなければならず、継続相であったり、あるいはアスペクト対立のない存在動詞であることは許されない。

指摘2：時期を表す従属文において、ニ、デがない場合は、どのような動詞も主文の述語にくることができるが、ニ、デがある場合は、基本的に運動動詞の完成相に限られる。なお、「トキニ、マエニ、アトデ」とシテイルが共起している場合があるとすれば、それはパーフェクトの意味となってしまう。

指摘1に対する反例

- (1) 地球に人間が存在する前に宗教は存在したか。(宇宙科学と宗教)
- (2) 「誰々さんのあのやり方はダメだ！」と批判している前に自分ができること、したいことをやってしまおうよ、と。(NEWS 1209)
- (3) しかしその人達はそれらしく動きまわる気配もなく依然として寝台のぐるりに凝立していた。暫く見ていた後、彼はまた眼を転じてほかの窓を眺めはじめた。洗濯屋の二階には今晚はミシンを踏んでいる男の姿が見えなかった。(『ある崖上の』)

例(1)、(2)は「まえ節」の修飾部に「存在する」、「批判している」のような静態動詞のスル形、主体動作動詞のシテイル形がくる例であり、例(3)は、「あと節」の修飾部に運動動詞の継続相「シテイタ」がくる例である。工藤(1995)の指摘1に背いている。

指摘2に対する反例

- (4) (略)もっともここへくる前に魚屋の二階に居候してたんで……」

(フケン)

- (5) 己れを忘れるという事を非常に安っぽく見る彼は、また容易に己れを忘れる事の出来ない性質に父母から生み付けられていた。
「出来なければ死ぬまでさ」と放り出すように云った後で、彼はまだお秀の様子を窺っていた。腹の中に言葉通りの断乎たる何物も出て来ないのが耻ずかしいとも何とも思えなかった。
(『明暗』)

例(4)、(5)において、主節の述語「居候してた」、「様子を窺っていた」はみな動作の継続を意味し、工藤(1995)の指摘2に背いている。

第三に、時間節と複文主節の出来事間の時間関係について、さらに詳しく検討すべきところが多い。

例えば、工藤(1995)では、「とき」で結ばれた従属複文において、二つ(細かくは四つ)のタイプの同時関係性が生み出される：重複的同時性(全体的同時性、部分的同時性)、接触的同時性(限界達成前の段階との同時、限界達成後の段階との同時)と指摘している¹が、出来事間の時間関係と動詞の種類との関係を詳しく述べていない²。

また、「まえ」で結ばれた従属複文において、時間節と主節の出来事間は通常「後統一先行」関係になるしかないと認められているが、实例調査の結果、次の例(6)のような同時的關係になる場合も存在する。

- (6) ご丁寧に脱水時に時々注水している。夫曰く「ファジ〜制御だからな」……懐かしいヒビキだ……でも、違うと思う……というわけで、かろうじて動いている前に洗濯機を購入する事にしました。(きょうちゃんのお部屋ブログ編)
- (7) 朝、お迎えにきてくれる運転手さんと「今日のみの虫談議」をするのが日課だったから二人で消えたみの虫の安否を気遣っているのです。ま、まさかもう、ふ化しちゃったのかしら？う〜んっ心配だ。そういやこないだ進研ゼミの取材で高校生へのメッ

1 似たような観点は小川(1985)、構文論グループ(1989)の研究にも見られる。

2 この点については第2章でまた詳しく述べることにする。

セージみたいな受けたんだけど、ふと考えた。高校時代つてもう10年以上前なんだ。は、早い。大学だつてもう……みの虫の心配している前に自分の人生が心配になってきた。(Untitled Document)

例(6)、(7)の下線部はそれぞれ「かろうじて動いているうちに、洗濯機を購入する事にしました」、「みの虫の心配しているうちに自分の人生が心配になってきた」と解釈でき、時間節と主節の出来事間は「後統一先行」関係ではなく、部分的「同時」関係になる。

以上述べてきたとおり、時間節の研究にまだ多くの問題が残っており、体系的な研究はないのである。本書では、＜時期限定＞的なものの中心をなす「とき節」、「まえ節」、「あと節」構文を研究対象に取り上げ、「とき節」、「まえ節」、「あと節」構文の構成とそれらの表す時間的な意味の実態を割りと全面的に記述することを目的としている。本書の記述分析を通し、先行研究における問題点を明らかにし、時間節を研究する新しい道を開きたいと考える。

1.2 本書と関連する概念

現代日本語における動詞のアスペクト・テンス体系は奥田(1977)、鈴木(1979)を参照している。

表1-2 動詞のアスペクト・テンス体系

アスペクト \ テンス	非過去形	過去形
完成相	スル	シタ
継続相	シテイル	シテイタ

本書では、工藤(1995)の動詞分類を採用する。

工藤(1995)では、アスペクト対立の有無の観点から、現代日本語の動詞を外的運動動詞、内的情態動詞、静態動詞と3分類している。また、＜動作＞か＜変化＞かという観点と＜主体＞か＜客体＞かという観点を組み合わせて、外的運動動詞を主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞に3分類している。

表1-3 アスペクト対立の有無による動詞分類

外的運動動詞	主体動作・客体変化動詞(内的限界動詞)	作る・買う
	主体変化動詞(内的限界動詞)	死ぬ・現れる
	主体動作動詞(非内的限界動詞)	遊ぶ・食べる
内的情態動詞	思考、感情、知覚、感覚を表す動詞(非内的限界動詞)	思う・諦める・困る・音がする・痺れる
静態動詞	存在、空間的配置、関係、特性を表す動詞(非内的限界動詞)	ある・いる・面している・似ている

工藤(1995)の動詞(アスペクト対立のない静態動詞を除く)のスル形とシテイル形の表す意味についての記述は以下のようにまとめられる。ここでいう<ひとまとまり性>とは、運動(動作、変化)の成立=開始限界から終了限界までを全一的にとらえることである。<限界達成性>とは開始の時間的限界が終了の時間的限界のどちらかをとらえることで、<終了限界達成性>は変化の終了(結果の成立)限界をとらえ、<開始限界達成性>は動作の成立=開始限界をとらえる。

表1-4 動詞のスル形とシテイル形の表す意味

		スル	シテイル
運動動詞	主体動作・客体変化動詞	ひとまとまり性 = 終了限界達成性	動作継続性(動作主 人) 変化結果継続性(動作主 物)
	主体変化動詞	終了限界達成性	変化結果継続性
	主体動作動詞	ひとまとまり性 開始限界達成性	動作継続性
内的情態動詞		全一性 発生性 1人称	思考感情等の長期的継続性 1・2・3人称

また、工藤(1995)の解説によると、シテイル(シテイタ)というアスペクト形式の基本的意味は継続性であるが、「パーフェクト性」(例：その本なら、一度読んでよ)、「反復性」(例：あの子は、マンガばかり読んでいる)、「単なる状態性」(例：この道は曲がっている)という三つの派生的意味を持っている。パーフェクトとは、「設定時点に対するできごと時点の先行性」というテンスの要素と、「運動自体の完成性+その効力」というアスペクト的要素を相互前提的に含みこんだ、複合的な時間概念である。

1.3 研究方法と資料

本書は、上述の研究目的をめぐって、コーパスやインターネットなどから集めた実際の使用例の記述的分析をとる。具体的な研究方法と資料は次の通りである。

① 先行研究における問題点を指摘し、本書の研究テーマを決める。

1970年代から今日までの国語年鑑に登録している時間節、複文関係の著作と論文を収集し、それらの研究を吟味し、問題点を見つける。その問題点の解決を巡って、本書の研究テーマを定める。

② コーパスやインターネットから実例を集める。

例文検索の方法としては、コーパスやインターネットなどから、漢字表記の「時」、「前」、「後」及び仮名表記の「とき」、「まえ」、「あと」を含む時間の従属複文の例を検索した。本書では、時間節にも、複文主節にも動詞述語がくる場合のみを検討する。

例文の出所：

『中日対訳コーパス』（日本学研究センター 2002）

新潮文庫100冊

SICコーパス

インターネット検索（マエニ節の特殊な用法を記述する場合のみ、一部インターネットから取った例文を使った）

③ 実例分析

集めた「とき節」、「まえ節」、「あと節」関係の例文をそれぞれ分析する。まず時間節の述部にくる動詞のアスペクト・テンス形式及び動詞の種類により例文分類をし、時間節の述部の動詞の出現状況をまとめる。次に、分類しおわった例文の意味分析をし、時間節と主節の出来事間の時間関係と動詞のアスペクト・テンス的な意味との相関性を検討する。最後に、記述分析の結果をまとめる。

④ 本書の結論

各部分の記述をまとめ、本書の結論を出す。

1.4 本書の構成と概要

本書は、第1章から第5章によって構成されている。

第1章：序論

第1章では、本書の研究目的、研究対象、研究方法と資料を決めて、本書の構成と概要を紹介する。

第2章：「とき節」構文について

第2章では、実例分析を通し、「とき」節構文の表す時間的な意味と条件など論理的な意味を検討する。主に次の四つの問題を扱う：「とき」節にどんな述語動詞が見られるか。「とき節」を構成する述語動詞と複文主節の述語動詞とはどういう関係になるか。「とき」節構文の表す時間的な意味の多義性解釈のメカニズムは何であるか。「とき」節構文の表す時間的な意味と論理的な意味とのつながりは何であるか。

第3章：「まえ節」構文について

第3章では、実例分析を通し、「まえ節」構文の表す時間的な意味と空間的な意味を検討する。主に四つの問題を扱う。「まえ節」にどんな述語動詞が見られるか。「まえ節」を構成する述語動詞と複文主節の述語動詞とはどういう関係になるか。「まえ節」構文の表す時間的な意味の特殊性は何であるか。「まえ節」構文の表す時間的な意味と空間的な意味のつながりは何であるか。

第4章：「あと節」構文について

第4章では、実例分析を通し、「あと節」構文を検討する。主に四つの問題を扱う。「あと節」にどんな述語動詞が見られるか。「あと節」を構成する述語動詞と複文主節の述語動詞とはどういう関係になるか。「あと節」構文の表す時間的な意味の特殊性は何であるか。「あと節」の主名詞「あと」の認知的な意味は何であるか。

第5章：終章

本書の研究対象である「とき節」、「まえ節」、「あと節」構文の異同を検討し、三者のつながりを探る。また、本書の意義、不足、及び今後の課題を取り上げる。

第二章 「とき節」構文について

2.1 先行研究とその問題点

「とき節」は述語成分＋形式名詞「とき」で構成されている。形式名詞である以上、格助詞が接続でき、形式上トキ、トキニという二つのバリエーションがある。また、これらの形式に係助詞ハをつけたトキハ、トキニハという形をとる場合もある。従属節を作ることからトキ、トキニは接続助詞的な機能を果たしている。

トキ、トキニによって構成される時間の従属複文は、時間節及び複文主節の述語動詞のアスペクト(完成相・継続相)・テンス(過去・非過去)変化により、幾つかのタイプの構文が見られる。「とき節」構文において、時間節と複文主節の出来事間は同時的な時間関係を示していると一般的に認められているが、格助詞ニのつくか否か、また、「とき節」及び主節の述語の位置に現れてくる動詞のアスペクト・テンス形式の違いなどにより、二つの出来事間の同時的な時間関係も少しずつ異なっている。本章は「とき節」構文における時間節と複文主節の時間関係及びその解釈のメカニズムを明らかにすることを目的としている。

「とき節」に関する先行研究は、主に二つの方面に分けられている。一つは、「とき」に後続する助詞の有無によるトキ、トキニの使い分けに集中するもので、代表的なものとして、益岡(1995)などが挙げられる。もう一つは、「とき節」と複文主節の出来事間の時間関係と述語動詞のアスペクト・テンス形式との関係に集中するもので、代表的なものとして、相対的テンス説を主張する町田(1989)、庵(2001)、絶対的テンス説を主張する三原(1992)、動詞の意味と絶対的テンス説の結合を主張する工藤(1995)などが挙げられる。

2.1.1 トキ、トキニの使い分けについて

益岡(1995)

益岡(1995)は寺村(1983)の「PトキニQ」という表現形式についての

「Qという事態の発生が既知の情報であって、それがいつ起こったのか
が問題になっている場合に典型的に使われる」という指摘、および「P
トキQ」という表現形式についての「まずPという事態を述べ、次にそれ
に続いて起こったことを、いわば発見として述べる場合」に適している
という指摘を評価し、その指摘のより広範な時間節への一般化を試みて
いる。

益岡(1995)は「格助詞を持つ場合には時を特定する格成分として機能
し、持たない場合には、時を設定する状況成分として機能する」と結論
づけている。

格成分：事態を叙述する部分の内部要素であり、焦点化されうる。

状況成分：事態を叙述する部分の外部要素であり、焦点化されない。

(1) 由紀子に電話した後でこの手紙を書いたのだ。

(2) 由紀子に電話した後この手紙を書いたのだ。

例(1)は「後」を焦点化する形式に変えられる：「この手紙を書いたの
は、由紀子に電話した後だ」、例(2)の「後」は焦点化できない。疑問代名
詞で検証すれば、例(1)は例(3)に言い換えてもいいが、例(2)は例(4)に
言い換えにくい。

(3) 誰から電話があったあとで、この手紙を書いたのですか。

(4) ? 誰から電話があったあと、この手紙を書いたのですか。

益岡(1995)の有名な研究は、広く認められていて、その研究結果も時
間節一般に適用できるようだ。益岡(1995)の指摘を本章で取り上げよう
とするトキ、トキニに当てはめれば、トキは、時を設定する状況成分と
して、文の内部要素であり、焦点化できない。トキニは、時を特定する
格成分として、文の外部要素であり、焦点化できるということになる。

2.1.2 「とき節」と複文主節の時間関係について

2.1.2.1 相対的テンス説

相対的テンス説とは、従属節のシタ形が、従属節の事態が主節の事態